〈私の研究〉

いわゆる“自然抗体”の研究

永井秀夫

過去二十年あまりの間、少ない年で十数名、多い年では七十名ほどの研究者の相手をしてきた。それらの人々がそれぞれにめざすテーマは同時に私にも課せられたことと等しかった。ところで、研究の巾を広くするということは、必然的に勢力の分散を余儀なくさせる。功利的にみれば、大へん損な立場である。お家芸に籠れば、一応の箔もつくであろう。しかし、それではその教室の在り方として偏向の譏りを免れない。ことに、臨床医学の教室ではそれは全く望ましくないと第三者は言うであろう。

さればといって、個人の能力には限界がある。得手、不得手のほかに、第一に好き嫌いの本性は否むべくもない。性に合わぬことに努力するのは大損である。たとえ多少は克服しえたとしても、それはに雑学に堕しかねない。雑学者は今の世では通用しない。板挟みを切り抜けるかね合いがむづかしい。さて、話を研究遍歴に移そう。

医学部を卒業した頃、私は生物物理化学に興味をもった。生体反応、たとえば過敏現象を物理化学の面から解析しようと志し、たしかにいくつかの新知見をえた。しかし、考えてみると、それらは現象の説明にはなりえても、原因解明に向っての遡及は覚束ない。というのは、その当時の物理化学の知見では、複雑な生体反応を解明するのにはいささか素朴に過ぎていたからである。方法論の転向を考えているうちに世は戦争に巻き込まれた。物資は極度に窮乏し、機器はおろか試薬の類までも入手できなくなった。わずかに小児栄養の片隅をしらべるのがせい一杯であった。

戦中・戦後の混乱期を経て、やっと昏迷から抜け出てみると、そこにはまぶしいほどの広野の展開があった。十年の退化を取り戻すために、乏しい研究費をはたいて、まず以て機器の整備を急いだ。昭和三十年春、日本医学総会が京都で開かれたとき、小児科学会総会は本学の明徳館を拝借し、「アレルギー反応、その基礎と臨床」の演題で四時間ほどの会長講演をおこなうことができた。「巨大な建物のあちらこちらを手を取って案内してくれた」という謝辞も頂いたが、私自身どことなく飽き足りない気持でもあった。現象解析はしょせんは説明に過ぎないと、またもや反省されたからである。

研究生活の第三期に入って、いわゆる〝自然抗体〟に取組んでいるうちに、大へん面白い事実をみ出した。ヒトの血清中には仮称A因子とB因子とが共存して、グラム陰性菌に対抗するという事実である。殺菌因子についての仮説はこの数十年間モコたるものであった。物質として体系づけえたことを今春の日本医学総会特別講演で述べた。こんどは、かなり満足している。

（女子大教授・児童医学）